



Title	4～6世紀シルクロードの文明交流と東アジア
Author(s)	朴, 天秀
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 33-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105027
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

4～6世紀シルクロードの文明交流と東アジア

朴 天 秀

はじめに

本稿では、ユーラシアシルクロード遺跡の出土遺物の移入経路とその歴史的背景を通じて東西文明の交流史にアプローチする。さらに、ユーラシアシルクロードの全域を貫く東西文明交流史を視野に入れながら、東アジアの交流史について考えていきたい。

1. 4～6世紀シルクロードの文明交流と東アジア

4世紀、ユーラシアの民族大移動をもたらしたフン(Hun)族が突然黒海沿岸に出現する。『後漢書』西域伝には123年頃、北匈奴の呼衍王が蒲類海、すなわちバルクル湖と秦海、つまり黒海の間を転々としながら西域の国々を制圧し略奪したという記録が見られる。フン(Hun)族は北匈奴を起源とし、375年頃からアラン族とゴート族を追い出し始め、5世紀にはアッティラ(Attila)の指揮下で東ローマはもちろん、西ローマ帝国まで大きく脅かした¹⁾。つまり、北匈奴が中部ユーラシアを経て徐々に西進し、西部ユーラシアではフン(Hun)族と呼ばれたのである。

ところで、4～5世紀にユーラシアの東端に位置する新羅にローマガラスがもたらされるのは、フン族が黒海沿岸の東西地域を掌握した時期に当たる。この時期、新羅では草原の道を起源とする積石木槨墳が出現し、5世紀には華やかな金冠をはじめとする黄金の装身具が多数埋葬される。

筆者は新羅の積石木槨墳について、313年の楽浪郡滅亡後、高句麗を通じてユーラシアの騎馬民族文化に接した新羅の選択的な受容の結果だと考える。黄金製品とローマガラスもこれと共に受容したものとする。同じ時期に南朝と交流した百済とは異なる選択の結果である。

新羅の陵墓域である大陵苑古墳群では金冠が6点出土した。新羅の金冠は樹枝形と鹿角形の立飾りが特徴である。このうち、校洞68番地出土の金冠は奈勿王陵と推定される119号墳の陪塚から出土したもので、3つの立飾りが樹枝形をしている。新羅の金冠には、その後、樹枝形が出の字形に変わり、鹿角形が加わる。また、冠帽を飾る鳥翼形冠飾りは鳥が飛び立つ形をしている。

そして冠帽を飾る新羅の鳥翼形冠飾りは鳥が飛び立つ形をしている。鳥翼形冠飾りは、その原型が伝集安出土品にあり、唐の李賢墓の壁画のうち、礼賓図に鳥羽冠をかぶった高句麗人が見られることから、高句麗に起源を持つことが分かる。

特に注目されるのは西鳳凰台古墳に隣接する王族墓である西鳳塚の金冠で、冠の中央に十字形の台座を設置し、その上に立てた木の枝に3羽の鳥が止まっている。

BC 5世紀前後に築造されたカザフスタンの天山山麓に位置するイシク・クルガン (Issyk) は積石木棺墓で、金で飾られた礼服と先の尖った帽子を着用した人骨が出土した。角帽はイランのペルセポリス (Persepolis) 宮殿の壁画やビストゥン (Bisotun) 碑文に見られるもので、これを築造した勢力は天山山麓を中心に居住していたサカ (Saka) 族である。

ところで、この帽子の側面に付けられた金の装飾が山、木、鳥で、鳥が山の木の上に止まっている形をしている点が注目される。西鳳塚出土の金冠の鳥が止まっている装飾と似ているからだ。

ロシアのドン川河口にあるノボチェルカスク (Novocherkassk) のホフラチ (Khokhlach) 古墳の1世紀のサルマタイ (Sarmatai) クルガン出土の宝石象嵌金製冠は、聖樹を中心に鹿が向かい合う意匠の立飾りがある。この冠は、中央の女神像の上に高い聖樹を立て、これを中心に同じ高さの聖樹を6本配置している。冠の正面には向かい合う4頭の鹿を飾り、左右には山羊2頭、鳥4羽を配置する。

鹿の角は、春になると落ち、再び生えてくる生命の木のような超自然的な存在として崇拝され、草原地帯ではスキタイ以来、装飾に使われた。

アフガニスタンのティリヤ・テペ (Tilla Tepe) 遺跡は、BC 1世紀から1世紀にかけて造営されたクシャーナ朝の王陵級古墳群である。そのうち6号墓の金冠は、頭部に巻く冠帯と5本の樹枝形立飾、円形の步搖で飾られている。冠帯には6葉のロゼット (rosette) 形装飾が20個付いている。ロゼット形装飾の中央にはトルコ石をはめ込み、縁には鍍金を施している。木の幹は左右対称に2本の枝が伸び、中央には先端につぼみのついた立飾1点が飾られている。左右は同じ構図だが、下部には小型のつぼみ、上部には大型のつぼみが付き、中央には透かし彫りで三日月形模様の境界で上下に心葉形、上部のつぼみの左右には翼を広げた2羽の鳥を向かい合わせに配置した同形の立飾4点が配置されている。

中国内モン古頭市にある西河子出土の慕容鮮卑の金製步搖は鹿とその角を形象化したもので、鹿角と步搖は新羅の金冠に影響を与えたと思われる。

中国遼寧省朝陽の甜草溝2号墓出土の金製步搖冠飾2点は、北票の房身村2号墓、喇嘛洞古墳群、馮素弗墓出土の金製步搖冠飾と類似しており、3世紀末から5世紀前葉まで大陵河流域一帯で金製步搖冠飾が流行したことを推測することができる。また、この地域の金製步搖冠飾は、黒海北部のホフラチ (Khokhlach) 古墳のサルマタイ (Sarmatai) の金冠やアフガニスタン

のティリヤ・テペ (Tillya Tepe) 6号墳の金冠にその系統を求められている。

5世紀初頭の阿羅加耶の王陵である咸安郡末伊山 45号墳出土の金銅冠は、鳳凰が向かい合った立飾りを持つ帯冠である。この冠の文様は房身村 2号墳の三日月形金製首飾と朝陽十二台 88M1号墳出土の金銅製透彫鞍の前輪に見られる鳳凰文と似ている。ところで、平安北道雲山龍湖洞出土の鳳凰文の立飾から見ると、高句麗で製作された可能性が高い。5世紀前葉の阿羅加耶の王陵である末伊山 45号墳出土の金銅冠には新羅産の装身具や馬具が副葬されることから、新羅を経由して流入したと思われる(図1)。

以上のことから、新羅の金冠の聖樹、聖獣、聖鳥は草原騎馬民族の信仰と関連していることが分かる。さらに、新羅の金製冠をはじめ、頸飾、帯飾、腕飾、飾履など身体を黄金で飾るのは、中原ではなく、カザフスタン・サカ (Saka) のイシク (Issyk) クルガンなどで見られる草原騎馬民族の伝統的な習慣である。

新羅は4世紀前葉の楽浪滅亡後、高句麗と直接交流し、高句麗にもたらされた草原騎馬民族の文化を選択的に受容したと思われる。

これと関連して興味深いのは、文武王碑で新羅王家が匈奴の王子である金日磾の子孫と自称していることである。これは、新羅王室が王家を神聖化するために騎馬民族の後裔であると自称しているもので、4世紀に導入されたその文化の導入背景を理解することができる。



図1 新羅の黄金文化の系統

慶州の皇南大塚南墳や瑞鳳塚から出土した網目文杯は、同形式のガラス器がドイツのケルン (Köln)、カザフスタンのカラ・アガチ (Kara-agachi) 古墳、キルギスのザル・アリク (Djal-Aryk) 古墳、中国河北省景県の祖氏墓で見られる。黒海沿岸のクリミア半島のケルチ (Kerch) 地域では斑点文皿、鳳首瓶などが集中的に出土している。

筆者は、1 世紀前後の時期から黒海沿岸にローマガラス器が集中的に搬入され、サルマタイ (Sarmatai) と匈奴の交流によりローマガラス器がモンゴルに流入したことを勘案すると、4 ～5 世紀の新羅古墳のローマガラス器もやはり黒海沿岸を経由したと考える。

後述するカザフスタンのカラ・アガチ (Kara-Agachi) 古墳でも、ローマガラス器と共に慶州市鶏林路 14 号墓出土の黄金宝剣と同一の石榴石嵌入及び鍍金技法で製作した銀製首輪装飾が出土している点が非常に注目される。鶏林路 14 号墓出土の黄金宝剣は、金、銀細工の区画内に様々な色彩の宝石、準宝石、色ガラスを埋め込んだ多彩装飾様式の工芸品である⁽²⁾。この宝剣の製作技法は黒海沿岸のギリシャ系工人が製作した BC 4 世紀以後のスキタイの金製品に見られるもので、鶏林路 14 号墓の黄金宝剣は 4 ～5 世紀に黒海沿岸に進出したフン (Hun) 族が両者を組み合わせて製作したものである。こうした金製品は西はハンガリー、ルーマニアをはじめとする黒海沿岸に集中的に分布し、東は天山山脈一帯を経て新羅に流入した (図 2)。

そして、鶏林路 14 号墓は埋葬主体部が長さ 3.5 m の小規模な積石木槨墳であるにもかかわらず



図2 5 世紀前後の草原の道上のフン族の金工品とローマガラス器の分布

らず、王と王族級の副葬品である黄金の宝剣が副葬されていた。同様の事例として日本の奈良県新沢千塚 126 号墳を挙げることができる。同古墳は一辺 22 m の小型の方墳であるにもかかわらず、ローマガラス器 2 点と新羅産の金製装身具が副葬されている点から、この墳墓の主を新羅からの移民と見ている。被葬者が新羅人なのに日本式の方墳に割竹形木棺が使用されているのは、移住者が地元のものを採用したからである。このような観点から鶏林路 14 号墳を見ると、墓主は移住者である可能性が高い。具体的にはフン (Hun) 族の子孫または中国キジル石窟の供養者像に見られるこの形式の宝剣を着装したソグド人と推定されるが、月城で 5 世紀のソグド人を描いた土偶が出土していることから、後者である可能性が高いと思う。これはユーラシアの東端である新羅にもソグド人が居住し、新羅に流入した文物がソグド人を媒介した事実を示している。

ところが最近、新羅古墳出土品のうち、地中海周辺で製作されたとされてきた皇南大塚南墳出土の鳳首瓶が中央アジア産であるという見解が示された。これは大陵苑古墳群出土品 21 点を化学組成分析によって導き出されたもので、すべてシリカ（けい砂）、炭酸ナトリウム（ソーダ灰）、炭酸カルシウム（石灰石）を主成分とするソーダ石灰ガラス (soda-lime glass) であることが確認された。また、ガラス製作に必要な融剤の組成分析により、ナトロンを用いたナトロン系 (natron glass) が 6 点、ソーダ灰を用いた植物灰系 (plant ash glass) が 15 点で、前者は地中海産、後者は中央アジア産という結果によるものである⁽³⁾。ナトロン系は天馬塚出土の亀甲文杯や皇南大塚北墳出土の切子亀甲文杯、植物灰系は皇南大塚南墳出土の単把手付鳳首瓶、網目文杯、藍色杯、月城路カー 13 号墳出土の波状文杯、金冠塚出土の波状文杯などである。

しかし、筆者は新羅古墳出土のローマガラス器のほとんどは地中海沿岸で製作されたと考える。その根拠はカザフスタンのカラ・アガチ (Kara-Agachi) 古墳出土の網目文杯である。この網目文杯は、台脚が取り付けられていること以外は皇南大塚南墳出土の網目文杯とほぼ同じで、台脚は天馬塚、金冠塚出土品と形が同じである。したがって、カラ・アガチ (Kara-Agachi) 古墳の網目文杯は、皇南大塚南墳出土品と同じ工房で製作されたと判断される。ところで、成分分析の結果、中央アジア産とされた皇南大塚南墳出土の鳳首瓶は、口縁に紺色のガラス帯を付けている点が注目される。なぜなら、この紺色のガラス帯は、共伴した網目文杯にも見られ



図3 5世紀草原の道を通ってきた新羅のローマガラス器

左：韓国の皇南大塚南墳 右：カザフスタンのカラ・アガチ (Kara-Agachi) フン族墓

るからである。したがって、三者は前述の通り、カラ・アガチ出土品と同様に地中海沿岸で製作されたと見ることができる（図3）。

さらに、5世紀の皇南大塚南墳出土品と同じ形式の鳳首瓶が中央アジアで出土した例はない。この形式の鳳首瓶はローマとその属州、そして黒海のケルチ（Kerch）地域で多数出土している。慶州月城路13号墓出土の波状文杯2点も口縁に紺色のガラス帯が付いた点から見て、やはり同じ地域で製作されたと考えられる。そして、これは前述したように黒海ケルチ（Kerch）地域で斑点文盤、鳳首瓶が多数出土することからも証明される。

これらの点を総合すると、中央アジアで製作されたガラス器が西北に向かって北上し、黒海に隣接するカザフスタン北部の草原地帯に流入したとは考えにくい。むしろ、地中海で製作されたガラス器が黒海と隣接するカザフスタン北部の草原地帯を経て搬入されたものと見るのが合理的である。これはカラ・アガチ（Kara-Agachi）古墳の北方に位置するボロヴォエ（Borovoe）湖周辺から鶏林路14号墓の黄金宝剣と同じガーネット嵌入及び樓金技法が使われた宝剣が出土している点は、黒海沿岸で製作されたフン（Hun）の宝剣と同様にローマガラス器がこれを経由して搬入されたことを裏付けている。

そして、ヒッパルス（Hippalus）の『エリートラ海案内書』（Periplus of the Erythraean Sea）には、ローマの輸出品の中にガラスの原料となるガラス塊が含まれていたと書かれている。これは多数の沈没船からガラス塊が見つかったことから裏付けられる。つまりガラス器の素材が移動したこと、成分分析結果の解釈に注意が必要である。

この時期、中原の皇帝墓と貴族墓でも複数のガラス器が副葬された事例はないが、遼寧省の馮素弗墓で5点副葬されているのは新羅古墳の副葬様相と酷似している。したがって、新羅古墳のガラス器副葬は積石木槨墳、金製装身具のように騎馬民族の習俗に従ったものと見ることができ、東アジアの他の地域では類例が見当たらない。

したがって、新羅のローマガラス器は燕・高句麗を通ってもたらされたと考える。これは金海大成洞91号墓でローマガラス器が前燕の馬具と青銅容器が共伴していることから分かる。特に4世紀後半に築造された月城路13号墓に2点のローマガラス器が副葬されていることは、4世紀にすでにガラス器が新羅に搬入されていたことを示唆している。

さらに最近、4世紀後半に築造された慶州チョクセム地区L17号木槨墓から金銅製晋式帯装飾具が出土した。そのため、これまで金官加耶の独自の交易結果と考えられていた大成洞88号墓出土の晋式帯装飾具も新羅を経由した可能性が高い。金官加耶と中国の交渉を示す文献史料は皆無だが、新羅は377年と382年に高句麗と共に前秦に使者を派遣している。新羅は313年の楽浪滅亡後、高句麗と国境を接するようになり、楽浪の代わりに高句麗を通じて中国と北方文物を受け入れた。

東アジアへのローマガラス器の流入経路を考えるにあたり、北燕の王族である遼寧省の馮素

弗墓が注目される。北燕を建国した馮跋は柔然と通婚し、契丹、庫莫奚を服属させて交易した⁽⁴⁾。柔然はモンゴルを中心に西は焉耆、東は高句麗、北はバイカル、南は陰山山脈北麓にまたがる騎馬民族国家である。

燕と高句麗は和戦両面的な関係だったが、336年安岳3号墳の墓主である前燕の佟寿が高句麗に亡命したことから分かるように、人的・物的交流が活発だった。また、『魏書』契丹伝に479年高句麗と柔然が連合した記事が見られる。

したがって、新羅のローマガラス器の搬入経路は、モンゴルのゴルモド (Gol-mod) II 匈奴墓からすでに1世紀には草原の道が形成されている点、新羅の古墳と馮素弗墓と副葬品が類似している点、馮素弗墓の出土品が柔然を経由した点から見て、天山北路よりモンゴルを経由する草原の道がより妥当と思われる。つまり、新羅のローマガラス器はフン (Hun) - 柔然 - 燕 - 高句麗を通して搬入されたのである (図4)。

次に日本出土のローマ琉璃器の移入経路と歴史的背景について見てみよう。

5世紀中葉に造営された奈良県新沢126号墳からは切子文盃と紺色皿が金製装身具と共に出土した。金製冠飾、垂飾付耳飾、指輪は同じ形式のものが慶州の皇南大塚で出土している。当時、日本の小形墓からこのように華やかな文物が副葬された例は見当たらず、ガラス器2点を副葬している点から126号墳の墓主は新羅の王族クラスの移住民であったと考えられる。

同時期、日本最大規模の王陵である大阪府大仙古墳 (伝仁徳陵) の前方部から金装甲冑とと



図4 4～5世紀のローマガラス器の分布

もに白色皿、紺色壺が出土しており、このガラス器は新羅を経由したものと推定される。

さらに注目されるのは、ガラスが出土した前方部は、後円部の被葬者と関わりのある陪塚であるという点で、後円部にはさらに多くのガラス器が埋葬された可能性が高い。同様の事例として、大陵苑古墳群の王陵である皇南大塚南墳は8点、陪塚の天馬塚は2点が副葬された例が挙げられる。

5世紀前半、倭が最も必要とした金製品、鉄素材とローマガラス器を含む西域文物を保有していた最も近い国は新羅だった。『日本書紀』允恭紀には加耶、百済との交渉記事が全く見られず、新羅との交渉記事だけが見られるという点で、5世紀前半には新羅と倭が非常に密接な関係であったことが分かる。大阪府大仙古墳の墓主は、5世紀中葉という築造年代と新羅を経由したローマガラス器が副葬されている点、文献史料などから、仁徳と見ることはできず、允恭と推定される。日本の王陵である大仙古墳から新羅経由のガラス器が出土しているのは、新羅と倭王権間の直接的な政治交渉を象徴するものである。

ところが、5世紀後葉に築造された慶州の皇南大塚北墳では突如、ササン朝ペルシアガラス器が副葬される。この切子文盃は、口縁部を磨いて平らにし、器面と底面全体に円文を切削して施している点から、ササン朝ペルシア産と判断される。このササン朝ペルシアガラスは、柔然を経由するローマガラスとは異なり、北魏を通じて搬入されたと考えられる。高句麗長寿王は北魏と極めて密接な関係だった。さらに、首都の大同からササン朝ペルシアガラスが多数出土していることから、高句麗を経由してペルシアガラス器が新羅に搬入され、皇南大塚北墳に埋葬されたと考えられる。

これは、新羅に搬入されたガラス器の産地と経路に変化があったことを示している。皇南大塚北墳出土の切子文盃は、5世紀中葉のユーラシア情勢を反映していると考えられる。筆者はこの時期を前後して、新羅に搬入されるガラス器がローマガラスからペルシアガラスに変わったと考える。にもかかわらず、5世紀末～6世紀初めにも大陵苑古墳群にはローマガラス器が継続的に副葬されている。結論から言えば、筆者はこの時期に埋葬されるローマガラス器は、伝世されて埋葬されたと考える。その理由は次の通りである。

5世紀中葉に築造された多羅国の王陵である陝川玉田 M1 号墳出土の斑点文ガラス器は、5世紀末に編年される慶州金鈴塚出土の2点と同じ形式である。

斑点文ガラス器はユーラシアで数百点が確認されているが、それぞれ器形、文様の形態が異なる。これは宙吹き技法で製作されたため、同一のものを製作するのが難しいためと思われる。それでも両者は形態が同じという点で、同じ工房で製作され、同じ時期に新羅に搬入されたと考えられる。陝川玉田 M1 号墳の墓主がこれを新羅から入手した5世紀前葉には、斑点文ガラス器がすでに新羅に搬入され、その後5世紀末まで伝世されたことが分かる。

したがって、新羅にローマガラス器が集中的に搬入されたのは5世紀前半であり、その後、

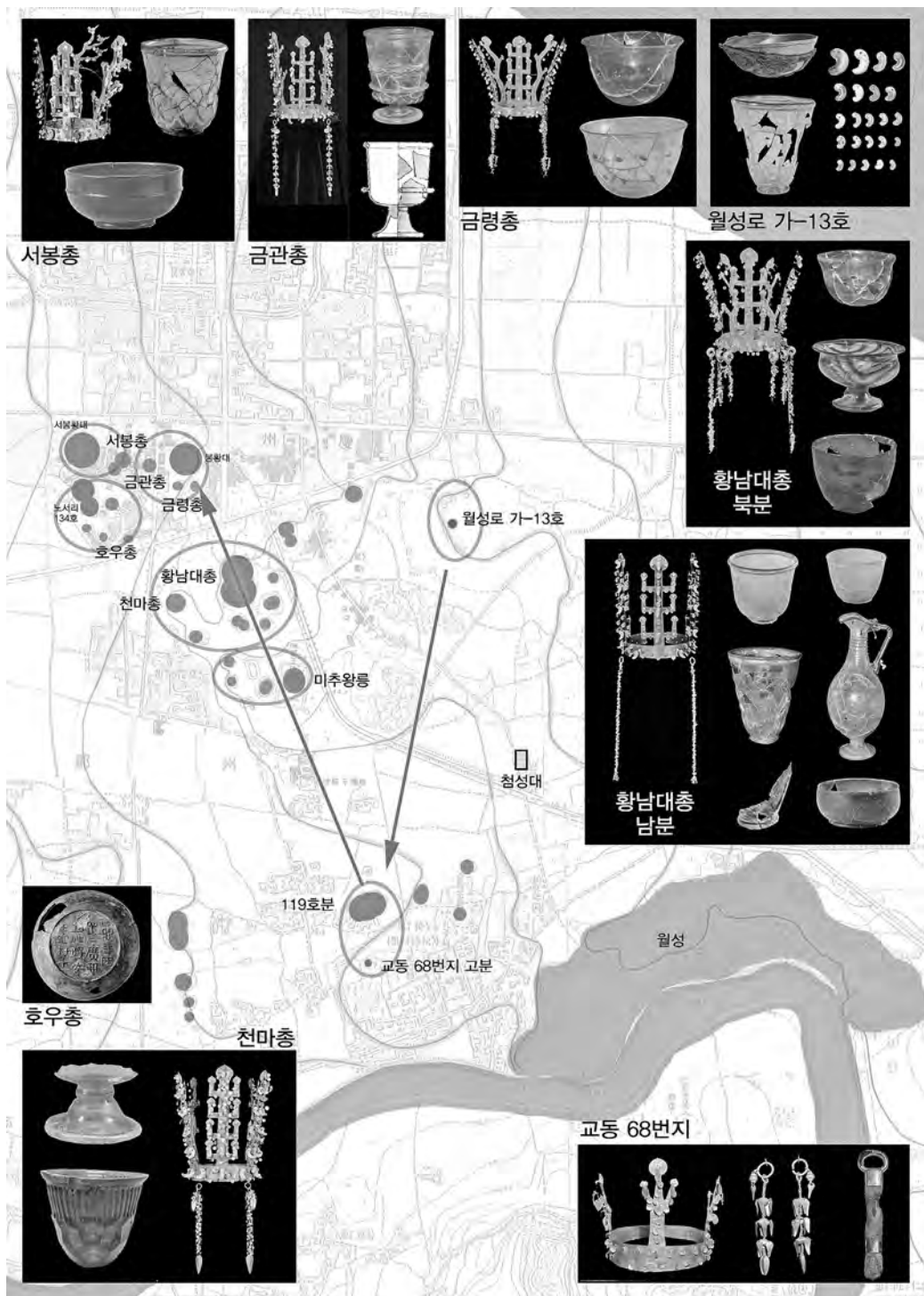


図5 4～5世紀のローマガラス器の出土遺跡

ササン朝ペルシアガラス器がもたらされ、5世紀後半と6世紀前葉に副葬されたローマガラス器は5世紀前葉に搬入され、伝世されたと判断する。

このように5世紀後半、突如としてローマガラス器の搬入が途絶え、ササン朝のペルシアガラス器が代わりにもたらされる。これはフン(Hun)帝国の崩壊と関係があると考えられる。453年、フン帝国の王アッティラ(Attila)の突然死により帝国が急速に崩壊し、東ローマとの交易網も衰退する。これは、フン(Hun)に代わってササン朝ペルシアがユーラシア・シルクロードを掌握してからである(図6)。このようにフン(Hun)帝国の崩壊とササン朝ペルシアの台頭により、5世紀後半、ユーラシア東部には砂漠の道と海の道を通じてササン朝ペルシアの文物が中国にもたらされる。新羅はこの時、北魏と交流していた高句麗を通じてササン朝ペルシア文物を受け入れた。

すなわち、4世紀～5世紀前半、新羅はユーラシア草原の道を通じて騎馬民族文化を受容し、5世紀後半には砂漠の道を通じてササン朝ペルシア文化を受容した。これはユーラシアの文明交流が単線的ではなく、多元的であることを示している。

226年に建国されたササン朝ペルシアは、中国南朝の梁の武帝中大通2年(530)と大通元年

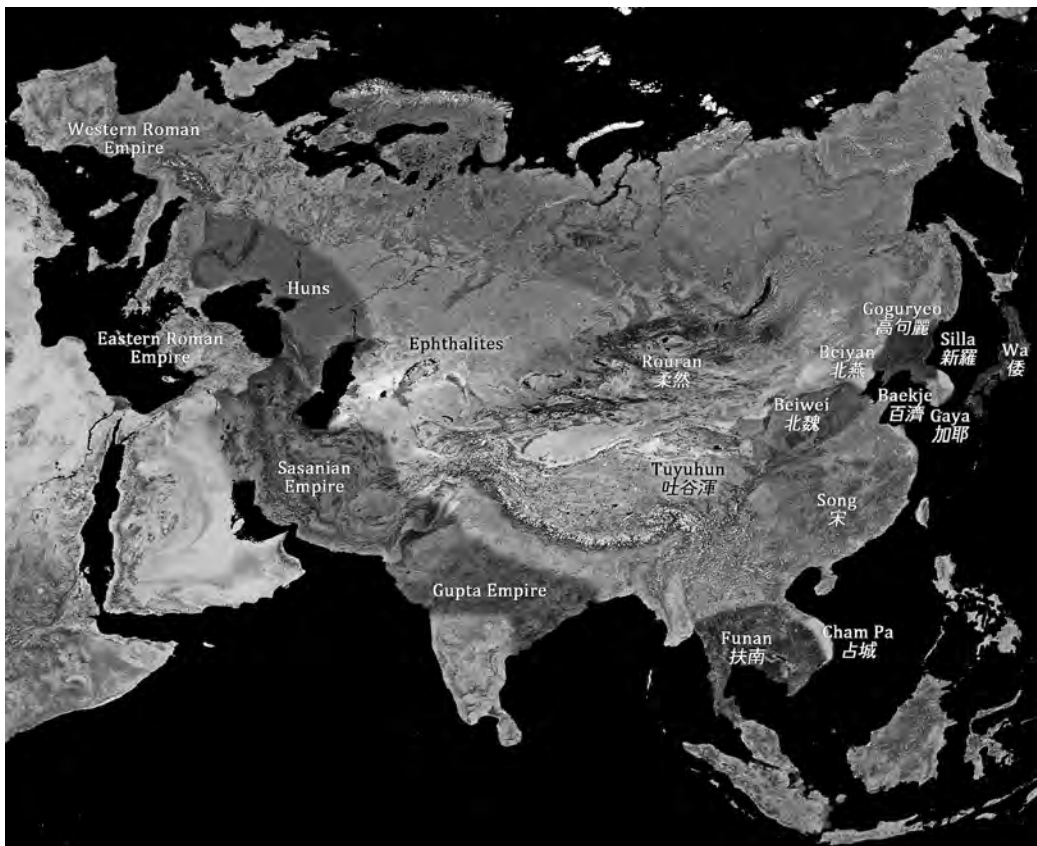


図6 5世紀前後のフン(Hun)族と周辺諸国

図7 4～6世紀のササン朝ペルシアガラス器と銀貨の分布

であり、これによりこの時期の砂漠の道を通じたササン朝ペルシア文物の輸入の主体が北魏であることが分かる。

ところが、6世紀前半の新羅古墳ではローマガラス器が伝世して副葬され、この時期に中国に活発にもたらされるササン朝ペルシアガラス器が見当たらない。筆者はこれについて、この時期、王墓を含む王族墓が発掘されていないことに起因すると考える。

こうした中、慶州市飾履塚2点、金冠塚1点、仁王洞C1号墳1点、大陵苑チョクセム41号墳1点など、新羅古墳にモザイクで装飾された二重円文ガラス玉が出土している点が注目される。このガラス玉は、断面が同心円のモザイク模様である色調の異なるガラス棒を切り取り、背景に貼り付けたもので、イラン北部カスピ海沿岸出土品に見られるササン朝ペルシアの系統である⁽⁶⁾。

このタイプのガラス玉は、新疆ニヤ（尼雅）遺跡1号墓地3号墓の漆製化粧筆筒の装飾として使用された。そして最近山西省大同市東信家居広場2期北魏墓から2点が出土した。したがって、6世紀の新羅古墳から出土する二重円文ガラス玉は、砂漠の道を通じて北魏に搬入された後、高句麗を経て新羅にもたらされたことが分かる。さらに、このガラス玉は新羅を経由して日本列島に持ち込まれ、香川県盛土山古墳、同安造田3号墳、宮城県追戸横穴墓から出土した（図8）。

その後も新疆營盤墓地M9号墓、寧夏回族自治区固原県李賢墓出土品などから見ると、ササン朝のペルシアガラス器が砂漠の道を経由して北朝に搬入されたことが分かる。北周天和4年（569）に没した原州刺史李賢墓からは銀鍍金胡瓶、青金石象嵌指輪、ガラス器などのペルシア文物が出土したが、このうち銀鍍金胡瓶はトロイア戦争の発端となったギリシャ神話の三つのシーンが描かれており、エフタル（Ephthalite）製と見られている⁽⁷⁾。ガラス器は円が浮き出る



図8 4～6世紀ササン朝ペルシアガラス玉の分布

ように切り出されたもので、カット技法や器形から見て典型的なササン朝ペルシアのガラス器である。

一方、江蘇省南京市象山7号墳、句容市春城宋墓出土のササン朝ペルシア産切子文盃は、海の道上のササン朝銀貨をはじめとする文物の事例から、海の道を通じて南朝に搬入されたと考えられる。また、この時期、南京の南朝陵墓出土のローマガラスも、ササン朝ペルシアを介してもたらされたと思われる。

6世紀後半の福岡県沖ノ島7－8号祭祀遺構からは、金銅製の新羅産馬具、玉虫象嵌透彫帯金具、金製指輪が出土した。特に8号遺構では、ササン朝ペルシアガラス器が確認された。これまで日本の研究者はこのガラス器が中国との直接交渉によって持ち込まれたと考えてきた。しかし、このガラス器は北周李賢墓出土品と類似しており、この時期、倭は中国に行けなかったが、新羅は北朝に使節を派遣していたことから、新羅を経由してもたらされたと判断する。同じ時期の奈良県藤ノ木古墳の金銅製鞍は、その構造的特徴と共伴の馬具から見て新羅産である。この鞍は亀甲文の中に象、鳳凰、龍などの文様が配置されており、杏葉は連珠文内に双鳥が配置されている。このような文様は飾履塚出土の飾履の文様と類似しており、その起源はペルシアと見ることができる。

また、前述のように5世紀後半の皇南大塚北墳からすでにササン朝ペルシアの切子文盃が出土している。これらの点を総合すると、新羅ではまだ6世紀前半のササン朝ペルシアガラス器は確認されていないが、今後出土するものと期待される。

このように6世紀後半に日本列島で新羅産、または新羅を経由した文物が増加する歴史的背景には、553年に新羅が漢江下流域を支配下に置いたことで対外交渉で有利な立場に立ったことと、かつての加耶地域に相当する南海沿岸の東部を確保したことで、百済と倭の交通が困難になった事実を挙げることができる。

京都府上賀茂神社出土のササン朝ペルシアガラス器は7世紀前半に秦氏と新羅の交渉を通じて搬入され、その後賀茂氏に伝わったと推定される⁽⁸⁾。秦氏の氏寺である京都府広隆寺の半跏思惟像と奉化郡北枝里仏、国宝83号仏は様式から、いずれも山東省青州市龍興寺址出土の北齊仏と同じ様式である⁽⁹⁾。そのため、ササン朝ガラス器が北齊から新羅に搬入され、仏像と共に日本に伝わったことが分かる（図9）。

7世紀後半、漆谷郡松林寺の五暝塼塔舍利容器の中からペルシアの円環文ガラス杯が出土した。この円環文は陝西省何家村窖藏出土品や奈良県正倉院所蔵品に見られる。このような円環文杯と関係のあるガラス器は、新疆庫木吐拉石窟の壁画に描かれており、隣接する森木賽姆石窟から出土している。

したがって、ササン朝ペルシア産の円環文杯は砂漠の道を通じて長安に搬入された後、新羅を経由して日本の正倉院にもたらされたことが分かる。



図9 半跏思惟像の東伝

おわりに

4世紀前半に出現する新羅の積石木槨墳は、ユーラシアの騎馬民族の墓制を起源とするものである。5世紀の新羅の積石木槨墳には豪華な金冠をはじめとする黄金の装飾品とともに埋葬されるが、身体を黄金で飾るのは草原の騎馬民族の伝統的な習慣である。新羅の積石木槨墳には中原の皇帝墓を凌駕する量のローマガラス器が副葬されるが、これは騎馬民族の習俗と類似している。ローマガラス器はフン(Hun)ー柔然ー高句麗を通ってもたらされたと考えられる。日本の新沢千塚126号墳と大仙古墳前方部のローマガラス器は新羅を経由したものである。これは新羅と倭王権間の直接的な政治交渉を象徴するものである。

ところが、5世紀後半に突如ローマガラス器の輸入が途絶え、ササン朝ペルシアのガラス器が搬入されるが、これはフン(Hun)帝国が崩壊し、ササン朝ペルシアがユーラシア・シルクロードに掌握したことを象徴している。

これは、東アジアにおける資料の分析からユーラシア・シルクロードの大変動を読み取れることを示す。これからの東アジアの研究からユーラシア・シルクロードの解明が期待される。

註

- (1) 金浩東 2016『アトラス 中央ユーラシア史』四季節
- (2) 尹相恵 2010「鶏林路の宝剑の製作地と製作集団」『慶州鶏林路 14 号墓』国立慶州博物館
- (3) 阿部善也・村串まどか 2020「新羅墳墓出土の古代ガラス製品はどこで作られたのか一目に見えない線で起源を探るー」『五色玲瓏 韓国古代ガラスと新羅』国立慶州博物館 pp. 306-312
- (4) 堀敏一 2008『東アジア世界の歴史』講談社
- (5) 辛島昇 2000『海のシルクロード』集英社
- (6) 道明三保子 1985「モザイク玉」『ペルシアの琉璃玉』淡交社
- (7) 李松蘭 2016「南北朝時代の北朝古墳出土の西方系瑠璃器」『韓国古代史探求』22 韓国古代史探求学会 pp. 318-319
- (8) 朴天秀 2023『古代韓日交流史』慶北大学校出版部
- (9) 大西修也 2002『日韓古代彫刻史論』中国書店